

愛知・首都圏方言の対照

地域帰属意識と言語使用

吉田健二

企画・調査協力者：鷗飼奈穂 大城奈生 神谷莉央 齊藤雅子
栢山満美子 立川桃華 中條敦斗 辻岡彩英 野田萌衣 樋口葵衣
古田幹登 宮川優奈 山下未歩 山盛早紀 吉村早織 齊藤泉音
秋谷采音 立花優布 筒井菜々香 吉田千咲 市川愛菜 今井楓
遠藤まなみ 大熊美結 加藤璃莉 菅野優衣 栗原瞳 小嶋瑚依
清野美愛 中澤莉子 野村彩乃 林沙樹音 堀口ノエル 松中花
丸山遙香 宮内璃音 柳原里咲 藪木華鈴 山口萌菜 若林亜実

1. 本稿の目的と概要

本稿は、2021 年度（後期）の愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」と、日本女子大学文学部日本文学科「日本語学演習」の受講生、および講師の吉田による共同言語調査の結果をまとめたものである。前者は東海地域、後者は首都圏生育の話者を対象として、学期内に授業活動の一環としておこなったもので、受講者それぞれ身近な 1 名に調査を実施した。事情により調査ができなかった受講者もいるが、先行研究の探索・内容報告、調査案の討議などに貢献している。調査地を計画的に配置できていないため、東海地域といっても愛知県 14 人・三重県 1 人とカバーする地域は狭く（表 1）、逆に首都圏は神奈川県相模原市から茨城県牛久市までとひろい地域の 20 名である（表 2）。年齢もかたよりがあり、対象とする地域の言語にたいする代表性には問題があるが、両地域の地域帰属意識や言語使用について明瞭なちがいがみとめられた点があったので報告する。

2. 調査の実施と調査項目

調査はすべて対面でおこなった。スライドにより調査内容を提示し、発話音

表 1 東海の話者一覧：2021 年 12 月時点の満年齢と性、言語習得期をすぎた地域、尾張・三河の帰属意識（1～7）、標準語の構成比（0～100）。「司令台」の使用により左右にわけ、尾張地域のみ言語習得地で北～南の順にならべた。

司令台：いわない				司令台：いう			
年／性	言語習得地	尾張	標準	年／性	言語習得地	尾張	標準
51 女	愛知県春日井市	2	60	47 女	愛知県小牧市	1	90
54 女	名古屋市東区	1	0	21 女	愛知県小牧市	1	20
83 女	名古屋市南区	1	0	53 女	名古屋市守山区	1	10
44 女	愛知県東浦町	1	0	43 女	愛知県清須市	1	50
21 女	愛知県豊田市	7	70	51 女	愛知県蟹江町	1	10
18 女	愛知県安城市	7	20	21 女	名古屋市熱田区	1	9
56 女	三重県松阪市	3	30	18 男	名古屋市天白区	1	30
				15 男	名古屋市港区	2	25
58.0				33.6			28.3

声の録音、音声聴取実験における刺激音声の提示はスマートフォンでおこなった。成果発表において個人が特定されるような情報の開示をおこなわないことを約束したうえで、氏名・生年月日・性別・居住歴を記録した。調査期間は 2021 年 12 月で、所要時間は 1 人につき約 30 分。調査項目は以下のとおり、語彙・文法・音声・言語意識をふくむ。吉田担当の愛知淑徳大学国文学科「国語学演習」でおこなっている調査項目から一部を採用している（吉田・他 2019, 2020）。

調査項目（一部：下線は本稿で報告するもの）

語彙：朝礼台、とても、だよ（断定）、小学校の登下校グループ、「連れ」の意味、
等

文法：来なかった等（動詞過去打消形）、一段・カ変動詞可能形、「じゃん・じゃんね」等の用法 等

音声：姓のアクセント、母音無声化、チームわけじゃんけんのかげごえ 等

言語意識：自身のことばの構成要素と構成比、地域帰属意識 等

表2 首都圏の話者一覧：2021年12月時点の満年齢・言語習得期にすぎた地域・その地域が首都圏である意識（1～7）。「連れ」の意味の回答により左右にわけ、年齢順にならべた。グレーは東京駅から70km圏外の話者。

友人				配偶者			
年/性	言語習得地	首都	標準	年/性	言語習得地	首都	標準
52女	埼玉県所沢市	7	50	81女	東京都世田谷区	3	0
50女	群馬県玉村町	2	50	77女	茨城県牛久市	2	0
50女	東京都大田区	7	60	54女	茨城県取手市	4	50
48女	東京都練馬区	4	100	54女	東京都東大和市	6	100
24男	千葉県柏市	7	100	53女	埼玉県新座市	7	50
21女	東京都新宿区	7	100	50女	横浜市金沢区	7	80
20女	栃木県小山市	4	50	49女	埼玉県所沢市	7	100
20女	横浜市緑区	7	0	47女	埼玉県杉戸町	5	100
20女	東京都武蔵野市	7	80	40女	神奈川県相模原市	7	60
16男	東京都港区	7	100	20女	東京都杉並区	7	95
32.1				52.5		5.89	67.1

3. 結果（1）言語意識

3.1. 地域の帰属意識

表1・2には話者が5～15歳にもっともながくすごした地域を「言語習得地」としてしめた。その地域のことばを「母方言」とし、それに対する意識をたずねた。生育歴を確認した結果、この時期をすごしたのが首都圏ではないことが判明した3名を分析からはずした。

東海地域については「その地域が尾張・三河のいずれだと思うか」を7段階でこたえていただいた。表1でグレーのセルの話者は行政区分で「尾張」ではない地域のかたがたで、これをのぞくとすべて「1＝疑いなく尾張」か「2」だった。逆に三河2名（豊田・安城）は「7＝疑いなく三河」だった。松川・水野・安井・吉田（2021:124）では両地域の境界地域付近で帰属意識が中間的な話者もいたが、そこからはなれた地域がおおい今回は、帰属意識がいずれかに明瞭にわかれている。三重・松坂の1名は「3」だったが、愛知が母方言ではないかたには意味をなさない質問だったため、中間の判断になったとおもわれる。

首都圏の話者には「母方言の地域は首都圏だと思うか」をたずねた。国立国

語研究所の「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクトでは「言語圏としての首都圏」が拡大しているという認識にもとづき、「東京駅から約70キロ圏」という定義を採用している（三井 2014:2）。今回の首都圏の20名のうち群馬県玉村町（グレーでしめた）をのぞく19名の言語習得地はこの範囲におさまる。この19名の「首都圏」意識は平均値5.89とひじょうにたかい（表2「首都」欄の右最下段）。都心から距離のある地域の話者が「1＝絶対首都圏ではない」にちかい回答をしているが、おおくの話者が「7＝まちがいでなく首都圏」とこたえた。「首都圏」意識の拡大がうかがえる。言語習得期を世田谷区（成城）ですごし中央区に在住する、今回の調査最高齢の話者は「3」をあたえているが、この世代では「首都圏」だと意識する範囲が現在よりせまかったことを反映した回答であろう。

3.2. 自身のことばの構成要素：「標準語」の割合

吉田・他（2017）以降、自身のことばの構成要素と構成比をたずねている。表1・2の「標準」欄にしめた。個人による判断のちがいがおおきいが、東海が平均3割弱、首都圏が7割弱と、やはり首都圏で「自分の母方言は標準語にちかい」という判断が優勢だった。前節の「自分の母方言の地域は首都圏である」という意識と、ここの「標準語を話している」という意識とは関連が予想されるが、単回帰分析の結果よわい相関しかみいだされなかった（ $r^2=.222$; $p=.042$ ）。標準語ではなく東京方言・神奈川方言等の構成率がたかいという判断をしめた話者がいたためである。久野（2014:20）は首都圏のひとつに「無邪気に「自分は標準語を話している」と思」う傾向があると指摘している。筆者も個人的にそのような印象をもつが、今回の結果は、首都圏にも自身の母方言と標準語とをあるていど分離してかんがえる人も一定の割合でいることを示唆する。

3.3. 母方言にたいする態度

言語意識項目として上記のほかに4項目をたずねた。図1に平均値をしめす。東海・首都圏で明瞭な差をしめすのは、「母方言と標準語がどのていどちかいか」で、首都圏は7段階で6.15、東海は3.36だった(表1、2でグレーでしめた話者をふくむ、以下おなじ)。「他地域出身の友人に母方言を使用するか」(図1の「異地域」)にも首都圏 4.7、東海 4.1と若干の差がみられるが、データの規模を考慮するとちがいがあるとは判断しがたい。名古屋を中心とした地域には、母方言にたいする劣等意識が現在はそれほどつよくないということかもしれない。

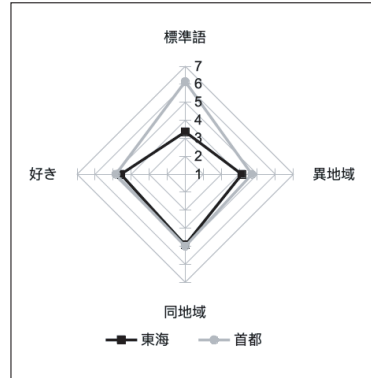


図1 言語意識項目:「標準語」母方言の標準語とのちかさ;「好き」母方言が好き;「同地域」「異地域」友人に母方言をつかって話すか

4. 結果 (2) 語彙

4.1 朝礼台・司令台

学校の校庭に置かれる人が登壇するための台を、名古屋市周辺で「司令台」ということがわかっていた(吉田・他 2016:244)。他地域での使用・認知の有無をさぐるため今回の調査にくわえたが、首都圏の21名全員が「司令台は知らない」(「朝礼台」は全員知っている)という結果だった。東海地域でも「司令台」というのは尾張地域のみで(表1右欄)、過去の知見と矛盾しない。また尾張地域でも「司令台」とは言わないという話者は中年以上にかたよる。比較的あたらしく拡大してきた呼称だと推測される。

4.2 「連れ」の意味

東海地域の人がつかう「連れ」を「配偶者」のことだとおもってきいていると、じつは「友人」についてはなしていた、ということがある。「連れ」はどちらも指示しうる語だが、中立な文脈でもちいたときの指示対象に地域差がある可

能性がかんがえられる。この検証のため吉田・他（2019）で調査を開始したが、調査文等が不適切なためか明瞭な結果がえられなかった。そこで今回あらたに、「知り合いの中年男性の発言」として「そこにはよく連れといく」と、行き先を曖昧にした文を提示して指示対象をたずねた。結果、東海は15名（三重もふくむ）のうち13名が「友人」、1名が「知り合い」で、「配偶者」は1名のみ。首都圏は表2にしめすように両者が同数だった。「友人」「配偶者」には有意な地域のかたよりが認められる（Fisherの正確確率検定： $p=0.009$ ）。東海地域で「連れ」が典型的には「友人」であるのにたいして首都圏では「配偶者」も有力、ということになるが、表2の「年齢」欄の最下段にしめすように、首都圏では「配偶者」とした話者のほうが年齢がたかい（Welchのt検定： $t(17.8) = -2.78$ ； $p=0.013$ ）。首都圏では「配偶者」が典型的な指示対象だが、配偶者がいることも、配偶者についてかたることすくない若い世代ではより身近な「友人」を思い浮かべる傾向がつよい、という意味理解の年代差（age-grading）かもしれないし、現実の変化の反映かもしれない。さらに検討が必要である。

5. 結果 (3) 文法項目

5.1. 一段・カ変動詞可能形の従来形・改新形の使用意識

一段・カ変動詞可能形の改新形は俗に「ら抜きことば」とよばれる。従来の可能形式からこの改新形への変化については、明治期に報告されて以来おおくの研究がある（塩田・滝島 2013 参照）。進行中の変化によくみられるように、形態・統語構造などに条件づけられた語ごとの変化の遅速（有無）もいられている（佐野 2009 など）。地域による変化の遅速もあり、変化が先行した尾張地方では江戸期から改新形がみられる（三宅 2019）。この改新形は「日本語の乱れ」の象徴として学校教科書にも取り上げられるにいたり（三井 2017）、その影響により変化が停滞する傾向も指摘されている（日高 2009）。

今回は、図2にしめす6つの動詞の可能形について、従来形・改新形それぞれを「セーターがちぢんで着れない」のような文で提示し、下線部の使用度を5段階でたずねた（「着れん」など、東海地域で一般的な「ん」による否定形も提示）。首都圏（右）は「見れた・見られた」で改新形が優勢、拍数が少ない「着

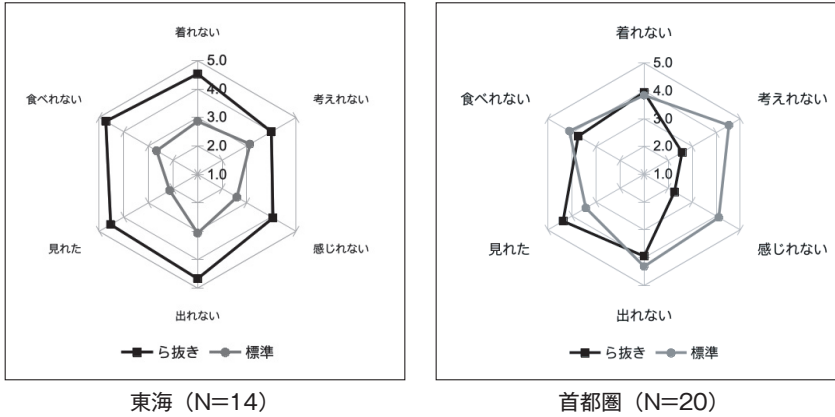


図2 動詞可能形の使用度(1=まったく使わない~5=とてもよく使う). ■従来形(標準)、●改新形(ら抜き)の平均値. ラベルの「着れない」等は「着れない(着れん)」等の改新形と、「着られない(着られん)」等の従来形の両方を代表する.

れない・着られない」「食べれない・食べられない」「出れない・出られない」では両者が拮抗し、拍数がおおい「感じれない・感じられない」「考えれない・考えられない」では改新形の使用度はそれぞれ2.3, 2.6とひくい。文化庁国語科(2021:18-20)で報告された全国調査の結果と整合する。これにたいして東海地域(左)では、拍数がおおい「考えれない」「感じれない」もふくめすべての動詞で改新形が優勢だった。ただしこれでわかるのは「使用の意識」であり、現実の使用とはことなる可能性もある。木學(2021:9)のLINEにおける使用例調査では、尾張地域の話者の「考える」の改新形使用率は0%だが、2・3拍「起きる」「食べる」「開ける」「受ける」の改新形使用率は55.6~87.5%とたかかった。また「使用」のていどをさぐる目的で空所に動詞の活用形を補充させる調査もおこなっているが、「感じる」「考える」も改新形使用率が30%をこえる(同論文 p.12)。尾張地域の可能形の改新形への変化が、全国調査にみられるよりも、使用・意識の両面でおおきの条件でより進行していることがうらづけられたとかがえる。

5.2. 「じゃん」「じゃんね」等の意味・機能の範囲

確認要求などの機能をもつ文末形式「じゃん」は、愛知県三河地域～静岡県西部地域で先行して使用され、のちに関東に伝播したと推定されている（井上1998）。また三河地域の「じゃん」「じゃんね」等には、意味・機能に共通語とのちがいがいることが指摘されている。ここでは山本（2010:70）が東三河方言について記述する4種の用法のうち以下の3つをとりあげる。（1-a）以外は共通語にもある用法だとする。

(1-a) 「三河弁独自用法」聞き手に情報なし、話し手の持つ情報を聞き手に伝える

(1-b) 「認識生成のアピール」聞き手の認識とは無関係に、話し手の主観的な気持ちや意見を述べる

(1-c) 「共通認識の喚起」話し手が聞き手に情報がある前提で、確認や同意を求める

また福原（2010:163-164）は、「若者言葉」における「じゃん」について、以下の「用法1」を基盤に「用法4」のような用法への拡張が起きているとする。ここではそのうち以下の3つをとりあげる。

(2-a) 「用法1」「一般論や共有知識」について「聞き手の理解や同意を前提」にはなす

(2-b) 「用法2」「聞き手に同意や理解の前提がない」内容について「同意や理解を要請する」

(2-c) 「用法4」「話し手の個人的な内容」で「聞き手に理解や同意のための前提知識がない」ばあいに、その理解を「強制する」

両者の記述にはかさなりがみとめられる。福原（2010）の（2-c）は山本（2010）の（1-b）とちかく、（2-b）は（1-a）とちかく、（2-a）は（1-c）とほぼおなじだとおもわれる。そこで、以下の3種類の対話を提示し、「下線部のことばの使い方がおかしいと感じるか」を5段階でたずねた。

(3-a) 「確認要求」(1-c) (2-a)

A「おとなり、去年まで毎年、海外旅行に行ってたじゃん。」

B「あー、そうそう、こないだはイタリアだったかな。」

(3-b) 「情報提供」(1-a) (2-b)

A「うち、夏休みに海外旅行に行っ
たじゃん。」
(相手は知らないことをわかって
いる)

B「そう、どこに行ったの?」(行っ
たことは知らなかった)

(3-c) 「理解強制」(1-b) (2-c)

A「私、けっこう心配性じゃん。」

B「そうなの。」(そのことは知らな
かった)

また、山本(2010)の記述などにもとづき、下線部を三河地域でもちいられる「じゃんか」「じゃんね」におきかえた対話についても調査した。さらに(3-b)(3-c)については、高見(2010:102)が愛知尾張方言で「自分のことを述べる、又は自分の経験に基づく情報を聞き手に提供する」機能をもつとする「(な)んだって」に下線部をおきかえた対話もくわえた。「自分のことを述べる」が(1-b, 2-c)、「自分の経験に基づく情報を聞き手に提供する」が(1-a, 2-b)にあたるという予測による。

図3に上記3種の対話、3~4種の文末形式ごとに、違和感(非容認度)の平均値をしめす。(3-a)「確認要求」では、「じゃん」「じゃんか」「じゃんね」のいずれも容認度がたかい(1.0にちかい)。

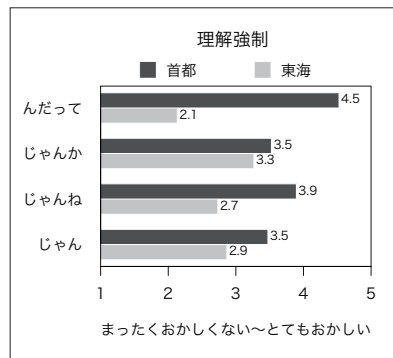
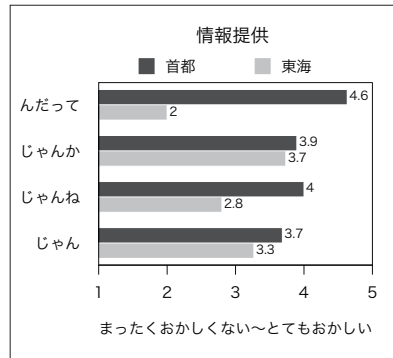
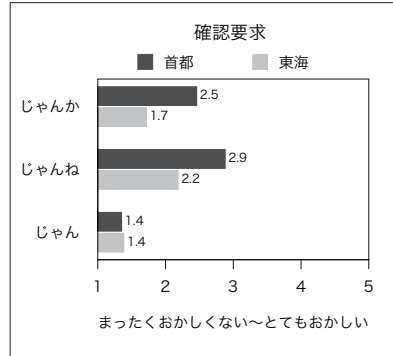


図3 「じゃん」「じゃんね」等の容認度の平均値(1=まったくおかしくない~5=とてもおかしい)。首都圏、東海地域それぞれの人数は図2とおなじ。

三河で主流の「じゃんか」「じゃんね」で容認度がさがるが、この形式になじみがない首都圏の話者については当然として、東海地域でも今回は尾張地域の話者がほとんどだったため、共通語的な「じゃん」にくらべると容認度がひくくなるようである。

(3-b)「情報提供」では、首都圏ではどの文末形式でも容認度がひくい。聞き手側の知識を前提としない発話での「じゃん」の使用が首都圏でひろく浸透していないということを示唆する。三河方言で「じゃん」につづけてつかわれる終助詞「か・ね」をそえたケースも、おそらくおなじ理由で許容度がひくい。東海地域でも「んだって」をのぞくと容認度はたかくない。「じゃん」「じゃんね」が首都圏にくらべるとやや容認度がたかいが、三河方言特有の文末形式である「じゃんね」との接触が多少あるからかもしれない。

(3-c)「理解強制」も(3-b)とほぼおなじ傾向で、首都圏ではどの文末形式をもちいても容認度がひくい。自分の個人的・主観的な内容を聞き手の知識を前提とせずのべるといふ、福原(2010)が「じゃん」の用法の若者言葉における拡張としたものは、首都圏での浸透度はたかくないということだとおもわれる。東海地域でも(3-b)とおなじく、「んだって」をのぞくと許容度はたかくない。これもここまでとおなじく三河特有の形式だからであろう。

いっぽう東海では、(3-b)、(3-c)のいずれについても、「(な)んだって」の容認度がたかい。愛知尾張地域では、この文末形式が聞き手側の知識を前提としない発話でも適切であることをうらづける。首都圏で極端に容認度がひくいのは、「うち、夏休みに海外旅行に行ったんだって」や「私、けっこう心配性なんだって」が、自身のことを話しているにもかかわらず伝聞のような語り口にきこえるからだとおもわれる。愛知尾張地域、岐阜美濃地域では、この「なんだって」は下降イントネーションで発話される(されなくてはいけない)。今回の調査ではこの情報の提供を徹底できなかったことが非常にひくい容認度の原因のひとつだとかんがえられる。「じゃん」「じゃんね」についても、イントネーションと意味(話者の心情)との関連がある可能性があり(愛知淑徳大学での討議における指摘)、その点も検討できる調査デザインが必要だった。今後の課題としたい。

6. 結果 (4) 音声項目：2 チームわけじゃんけんのかけごえ

スポーツやあそびなどで全員を2つのグループにわけるときのため3種類のうち2つをつかうじゃんけんのかけごえも調査した。東海地域については山田(2007:13)に「グー・チョキ・パーのいずれをつかうか(あるいはそれ以外か)」についての報告がある。本調査ではかけごえを実演していただき録音した。表3に一覧をしめす。おぼえていなかったかたや、録音ができなかったケースをのぞいている。

山田(2007:12)、佐々木(2012:17-18)によればグーとチョキをつかうケースもあるようだが、ここではすべてグーとパーをつかうものだった。また、語形・発想ともかなりちがいのもの(「グッとパーであわせ」と「グッとパーであわせましょ」など)があるにもかかわらず、東海と首都圏で完全に一致したかけごえはなかった。あそび関連の語彙や学校語彙はローカルルールとも関連した局所的な変異が生成・維持されやすいという従来の知見と合致する。

つぎに音声面の特徴について検討する。「グー」「パー」以降の部分で母音の長呼がみられたが、「グッとパーでそーろーい」「グッとパーであーわーせ」「グッパのうーちで」のように、末尾から2拍目と3拍目におかれる。「手」をだすタイミングを一斉にするためだとかんがえられる。この母音の長呼は東海だけにみられたが、首都圏の「わかれましょ」「あわせましょ」と末尾の句の拍数がおおく、全体がみじかいケースでは「グーパー」「グットッ」などのように長音・促音が挿入される。定延(2011:176-177)は、「ばかものー」「ば

表3 チームわけじゃんけんのかけごえと回答数。

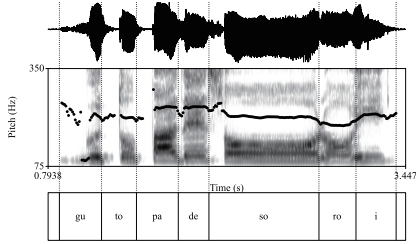
※はメロディをとまなうかけごえが観察されたもの。

東海		首都圏	
グッとパーでそろい*	4	グッとパーでわかれましょ*	4
グッとパーのそろい	1	グッとパーであわせましょ	1
グッとパーであわせ*	3	グーパーグーパーグーパージャン	1
グッとパーでわかれ	1	グーパージャン	1
グッとパーでしょ	1	グーパージャス*	1
グッパのうちで	1	グッパージャス	1
グッパグッパグッパ	1	グッパ*	2
		グットッパ	1

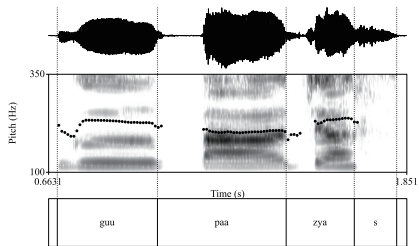
かもーん」のようにながい母音があらわれる位置にみられる安定的な傾向を、音声に「きもち」を反映させるときの「文法」にあたるものだとする。そこでは「最終音節」をのばす傾向が指摘されているが、ここでは、「動作のタイミングをはかる」という別種の要請によって、それよりひとつまえのタイミングでの長音化が occurring。

また、音符によって表現できるメロディをとともなうものが5例あった。そのうち3例の音響情報を図4にしめす。(a)は「グッとパーでそーろい」と末尾から3拍目(2音節目)の母音がながい。(b)は「グーパージャス」と末尾から2・3音節目がながい。この両者は【(ララシシ)ラーソ(ー)ラ】というメロディで実現されている。定延(2011:177-178)で「できた」「さーあね」などの発話にとともなうことが指摘されている【ラーソラ】とはほぼ同一であり、このメロディの一般性がうかがえる。

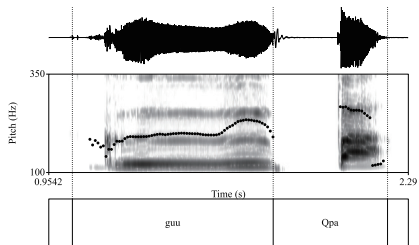
いっぽう(c)では「グーッパ」に【ミーソーラ】というメロディがあたえられている。ことなる系統のメロディなのか、あるいは【ラーソーラ】の一変種か、アクセント・イントネーションシステムがことなる他地域ではまたちがうメロディが観察されるのかなど、さらに検討すべきだとおもわれる。



a) 愛知県小牧市 (47歳・女)



b) 埼玉県杉戸町 (47歳・女)



c) 東京都東大和市 (54歳・女)

図4 チーム分けじゃんけんの音響情報(メロディをとともなうもの): 音声波形, スペクトログラムとピッチ, 音節または拍の境界.

7. まとめと課題

東海地域と首都圏の小規模な調査の結果から、両地域の言語意識と言語現象の比較対照をこころみた。関東における「首都圏」意識が拡大していること(3.1節)、母方言と共通語との距離の意識が首都圏より東海地域でおおきことは予想されたとおりだが、地元が首都圏であるという意識と自身のことばの標準語の構成比とのあいだの相関がおおきくないことや(3.2節)、母方言にたいする好悪や使用意識にはほぼ差がないという点(3.3節)はやや意外だった。また、「司令台」の使用や「連れ」の指示対象(4節)、いわゆる「ら抜きことば」の語彙的拡散(5.1節)については明瞭な地域差が確認できた。「じゃん」等については聞き手の知識を前提としない用法がまだあまり浸透していないこともうかがえた(5.2節)。チーム分けじゃんけんについては、両地域で完全に一致するかけごえがみつからなかったが、音声実現については共通する規則性もみられた(6節)。

話者数やカバーできた地域はまったく不十分で、とくに東海地域については、愛知県尾張地域の話者がほとんどだったため、三河地域の現象を中心にした調査項目については目的とした検討ができていない。次年度も調査を継続する予定であり、これらの不備をおぎない、今回は報告をみおくれた項目もあわせて知見を総括する機会をもちたい。「じゃんね」や「(な)んだって」のイントネーションとのかかわりなど、調査デザインに対象とする話者の言語知識をさぐるには不十分な点があることが判明したケースもある。今回えられた知見をもとに改善をはかりたい。

謝辞 ご教示をたまわった話者のみなさまにあつく感謝もうしあげます。ご協力いただいたにもかかわらず本稿の目的の関係でデータを除外したみなさんにはおわびもうしあげます。

参考文献

- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』 東京：岩波書店
- 木學理彩子 (2021) 「尾張地方における「ら抜き言葉」の使用状況と使用意識の調査—尾張地方と首都圏との比較からみる新たな可能性—」愛知淑徳大学卒業論文
- 久野マリ子 (2014) 「首都圏方言の形成と共通語化」三井はるみ・編 (2014) (pp.19-38)
- 佐々木香織 (2012) 「新潟県における 2 チーム分けジャンケンの掛け声の分布」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 15, 15-24.
- 定延利之 (2011) 「音声コミュニケーション」益岡隆志・編『はじめて学ぶ日本語学』 (pp.170-184) 京都：ミネルヴァ書房
- 佐野真一郎 (2009) 「現代日本語のヴォイスにおける進行中の言語変化に関する数量的研究—「ら抜き言葉」, 「さ入れ言葉」, 「れ足す言葉」を例として—」Sophia Linguistica: working papers in linguistics 57: 343-358.
- 塩田雄大・滝島雅子 (2013) 「『日本語は乱れている：9割』時代の実相～日本語のゆれに関する調査 (2013年3月) から②～」『放送研究と調査』2013年10月号：22-43.
- 高見あずさ (2010) 「愛知県尾張方言における終助詞の記述的研究—「ンダッテ」を中心に—」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』6: 95-102.
- 日高水穂 (2009) 「言語変化を抑制する規範意識」『日本語学』28 (9): 14-26.
- 福原裕一 (2010) 「フェイス・ワークとディスコース・マーカールの用法拡張—文末表現「じゃん」の分析を例にして—」Human Communication Studies 38: 159-172.
- 文化庁国語課 (2021) 「令和2年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/93398901_01.pdf
- 松川芽衣・水野友裕・安井望恵・吉田健二 (2021) 「愛知県若年層方言の地理的分布の傾向：尾張北部・尾張三河境界・渥美半島地域の Web 調査から」『愛知淑徳大学国語国文』44: 114-134.

- 三井はるみ (2014) 「非標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差」三井はるみ・編 (pp.1-18) .
- 三井はるみ・編 (2014) 『首都圏言語研究の視野 首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書』立川：国立国語研究所
- 三井はるみ (2017) 「言葉のゆれを考える」田近洵一・北原保雄・他『伝え合う言葉 中学国語 1』東京：教育出版 (pp.142-146) .
- 三宅俊浩 (2019) 「近世後期尾張周辺方言におけるラ抜き言葉の成立」『日本語の研究』15 (3) :1-17.
- 山田敏弘 (2007) 「岐阜・愛知の若年層方言について1—遊びのことば・学校のことば・オノマトペ—」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』56 (1) :11-41.
- 山本剛史 (2010) 「愛知県東部地方 (東三河地方) における「ジャン」の用法」方言・音声研究会・編『方言・音声研究』4: 68-73.
- 吉田健二・他 (2016) 「三重・愛知県境地域における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』39: 218-250.
- 吉田健二・他 (2017) 「三重・愛知・岐阜県境地域の言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』40: 207-242.
- 吉田健二・他 (2019) 「東海地域の言語実態調査 (1) 第一次計画と2018年度調査結果」『愛知淑徳大学国語国文』42: 176-208.
- 吉田健二・他 (2020) 「東海地域の言語実態調査 (2) 愛知県尾張地域と三河地域のちがいを中心に」『愛知淑徳大学国語国文』43: 173-192.